

国史跡・野崎城跡を歩く

③ 飯盛城虎口〜楠公寺

**元首相池田隼人が名付け親!?**

飯盛山に「楠公寺」というお寺がある。大きくはないけれど、よく手入れされて綺麗なのが、外から見てもよく分かる。

寺の名から、きっと楠木正成・正行父子と関係が深いのもかもしれないと思ひ、立ち寄り先に加えたのだ。

ずいぶん前に立てられたであろう由緒書を読んでもみると、四條畷の戦いで戦死した人を弔うために開山したとある。正平3年(1348)1月に起こった楠正行の軍勢と高師直の軍勢との戦いだ。ちなみに「正平」は、南朝側の元号だそう。

ところで、由緒書には、高師直を指して「賊将」と記されている。戦での「義」「賊」は、たんに視点の違いであって、お互い自分のことを「義」と思っているのだ。南朝側の視点で書かれた由緒書だから、敵方の高師直を賊軍呼ばわりしているのだ。



楠公寺

もともとは「妙法寺」と呼ばれていたらしい。昭和23年に元内閣総理大臣の池田勇人が名付け親となって「楠公寺」に改められたという。しかし当時の池田隼人は大蔵省の官僚もしくは退官した直後で(衆議院初当選は翌年)、総理大臣どころか政治家ではない。池田家と楠家の関係も調べてみたが、これといった情報は見当たらなかった。

池田隼人が楠公寺の名付け親になった経緯をご存じの方がおられたら、ぜひご一報いただきたい。

**石垣になり損ねた石たち**

ハイキングコースを楠公寺へ向かって歩く途中、道端に巨大な石が転がっている。楔を打った跡があるから、あきらかに人の手で加工された石だ。

その傍らに立札が立てられていて、石の由来が説明されている。それによると、石は「残念石」と呼ばれるらしい。何が残念かという点、本来なら大阪城の石垣になっていたはずだという。

約400年前、大阪城築城の折、全国から石垣用の石が集められた。重機のない当時、巨大な石を運ぶのはそうとうな難事だった。大名らはこぞって石を運び、威信を示そうとした。だが、中



石垣になれなかった残念石

には運搬中に落下して回収されないまま放棄されたり、何らかの理由で石垣になれなかったりした石が少なくない。大阪城の石垣になり損ねた残念な石だから「残念石」なのだ。石には大名家の家紋が刻印された。また楔の跡からも、どこから運ばれてきたのかわかるそう。

今はハイキングコースとして整備されているが、当時はろくな道のない山中だったはず。石垣に使うにはやや小型に見える石でも、人力で運ぶとなれば重労働だ。「よくこんなところまで……」と感動するやら呆れるやら。400年もの間、ここで時代の流れを見守り続けた石なのだ。

せっかくなので運び上げてきたのに落としてしまったのだとすると、運んでいた人たちはどうなったのだろう？ 大名家の家臣が監督として同行していたはずだから、きっとボロクソに怒られたんだろうとぼんやりとは想像できるが、どんな処分が下されたのか気になるところ。あるいは、途中で何個か失うことは、あらかじめ想定されていたのだろうか。